

幕末・維新期のある武士の生き方

～村上藩町奉行、鳥居与一左衛門和達のこと～

はじめに

新潟県村上藩に鳥居与一左衛門和達という人物がいた。

新潟の小藩の武士が、幕末から戊辰戦争にかけて、どのように生きたのか、多少なりとも伝われば光栄である。

村上鳥居家

「鳥居三十郎伝（新版）」（以下「三十郎伝」と記す）によると、鳥居家の家系は次のように記される。

鳥居家の先祖は、三河国に住んだ武家で、住地の名をとり、渡里伝内と言った。その子孫に、新田義貞に属した亘新左衛門忠景があり、慶長五年伏見城を守った鳥居元忠も、その一族である。

村上藩の鳥居家は、五代藩主弉信から六代七代に仕えた鳥居和篤からはじまって、明治に至るまで、累代内藤家の家老職をつとめた。別に鳥居左左衛門、鳥居与一左衛門家があり、合わせて鳥居三家という。

このように、鳥居家は、本家(内蔵助家?)、与一左衛門家(中鳥居)、左左衛門家(末鳥居)の三家に分かれ、本家が代々家老職を世襲してきた家柄である。本家は、内藤家の門閥の中では、内藤家初代の実家の流れを引く島田家(遠州・島田の出身)につぐ家柄であり、「村上郷土史」に記された禄高では、門閥家老の家柄である脇田家 850 石につぎ、他の門閥家老家江坂衛守・久永惣右衛門・内藤鎧吉郎・島田直枝とならんで 700 石となっている。

中鳥居・与一左衛門家

与一左衛門家は内藤家の家臣となった鳥居喜兵衛の子内蔵助和忠の次男与一左衛門和俊を祖とする分家であり、中鳥居とよばれた。寛文2年には150石、明暦2年には200石、その子与一左衛門和堅は宝永7年に番頭250石となる。その後、男系の後継者に恵まれず、和通、与市左衛門(諱・不詳)と娘に養子をとる形で家系をつなぐが、その子と市のあとの友之助和道、その次の又男はいずれも鳥居左兵衛家から養子を得ている。「村上市史資料編2」所収の系譜には時期が書いていなく、いつの頃のことかよく分からないが、又男は、文政年間の人物と考えられ、和達の父の世代と考えられる。

なお、「三十郎伝」によると、末鳥居・左左衛門家は17世紀末の元禄(1688～1704)、あるいはその前の延宝・天和・貞享(1670～87)のころ、和俊の子どもの和衛が分家してきた家であり、幕末では家老に次ぐ重役である番頭をつとめ、明治初期には家老以外の家柄である給人のなかではもっとも多い350石を得ている。

与一左衛門家は、幕末期には町奉行を世襲しており、村上之城下にはみ出す形で町が形成され中小藩士が多く住んでいた飯野町に、奉行所の役宅を兼ねた広い屋敷を持っていた。禄高は230石で給人のなかでは12位、全体では18位という上級家臣である。

鳥居喜代之助の地震体験

「村上市史」において、鳥居与一左衛門和達の姿が最初に現れるのは、安政2(1855)年の江戸においてである。江戸屋敷には、おもに定府または定詰めとよばれる先祖以来の江戸在住の家臣たちがいたが、これに加え、国元から、藩の重職につく教育をかねて、若干の家臣が派遣されていた。当時、鳥居喜代之助と呼ばれたのちの町奉行与一左衛門和達もこうした江戸一回詰めとして上京しており、幕府老中職にある内藤信親の近習をしている。したがって、幕政の動きを藩主信親を通して身近に感じる地位にいたことになる。

さて、安政2年10月2日、四つ時すぎ、大地震が発生、内藤家上屋敷で主君のそばで宿直をしていた喜代之助は、とっさに庭に飛び出して主君の寝所に向かおうとしたが、落ちてきた瓦にあたり気絶、その後、気がついてからは、主君と奥方を救出したとの手紙を父に送っている。

鳥居存九郎の蝦夷地・樺太探検

地震の際の機敏な反応が、信親の目にとまったのか、鳥居喜代之助改め鳥居存九郎は、2年後の安政4(1857)、大役を命じられた。この時期、ロシアとの間で日露和親条約が締結されていたが、同条約では、樺太(サハリン)はロシアと雑居地と定められており、幕府においても北蝦夷と呼ばれた樺太島ならびに未知の部分が多い南蝦夷島(北海道)の状況確認が重要課題となっていた。この探検に鳥居存九郎、のちの与一左衛門和達らが命じられたのである。

この年、幕府は松浦武四郎を向山源太夫の配下と言う形でこの地に派遣したほか、老中たちは自らの藩士を次々にこの方面に派遣、調査させており、肥前・佐賀藩ものに開拓使で活躍、佐賀の乱で敗死する島義勇らを派遣した。越後出雲崎の名主で探検家の島井権之助などもこの地の探査に向かうなど、この年は、北海道・樺太探検ブームとさえいえるような状態となっている。

こうした中で、老中をしていた藩主信親が派遣したのが、のちに三条奉行となる水谷栄之丞(孫平治)、医師の窪田潜龍と存九郎であった。

3人は安政4年3月22日蝦夷派遣の命を受け、4月13日村上を出発、5月8日に函館に到着、箱館奉行村垣淡路守範正(万延元年遣米使節副使として渡米する)に面会している。『村垣淡路守日記』5月9日に「備前守(※長岡藩・牧野忠雅)殿家来森一馬、高井左藤太、紀伊守(※内藤信親)殿家来鳥居存九郎、水谷栄之丞、窪田潜龍、昨日着ニ而来ル」との記事があり、5月11日には、「備前守殿紀伊守殿家来、明後日夷地江出立ニ付、先触相渡、何れも松前通り、西蝦夷地、宗谷より北蝦夷渡海、返り北海岸より東通り、時宜ニ寄、エトロフ、クナシリ渡海之積り」との記事があり、確かめられる。

この航海の様子を「村上市史」をもとにたどる。閏5月13日宗谷に到着。翌朝船便で樺太に向かう。「北行すること数里、四顧縹渺として波浪天を呑む。方に其の舟に升起て波上に在れば、海に有るを覚えず」と記すように荒波の宗谷海峡を渡り、樺太に到着する。

その後、西海岸を北上、29日には北緯五十度を超え、ポロコタンについている。この地をほぼ目的地と考えていたか、彼らは引き返していく。帰路の船も荒れ、「船動揺欹側し、殆ど將に覆没せんとすること数次」という状態であったという。さらに酒・塩・梅干しなどの食料もなくなり、残ったものは味噌桶と米苞だけという。6月23日樺太最南端の白主に到着、風待ちをしたのか、ようやく7月3日船出、宗谷海峡はやはり時化で、宗谷入港寸前、強風にあおられ船は座礁、海に投げ出されたが、かろうじてアイヌの人々に助けられ、夜半に宗谷に着く。

彼らの旅はつづく。5日には宗谷からオホーツク海に沿って東に向かい、28日には南東部の厚岸に、今度は南海岸に沿ってすすみ、8月20日箱館に到着、箱館奉行に会って礼を述べたのち、9月13日に村上に帰着した。

この時の存九郎の記録が「北溟紀行」とまとめられ、原本が北海道大学にあるとのことである。(杉谷昭「幕末蝦夷地調査資料『入北記』について」他)さらに村上市史においても、「安政四年蝦夷紀行」(「北溟紀行」と同一物かどうかは不明)として引用もしつつ記述されている。しかし村上市史資料には所載しておらず、参照することはできなかった。

この経験が、存九郎(和達)にどのような影響を与えたのか、興味のあるところである。ただ、この探検に参加した存九郎・水谷栄之丞の両名とも、戊辰戦争期には抗戦派の立場に立っている。他方、戊辰戦争に関して新政府軍への帰順を説いた藩医・儒者の窪田玄仲がいる。この人物が潜龍である可能性は高い。同じ体験であってもちがう方向にすすんだようである。

和達と三十郎

さて、この探検の時、存九郎はまだ家督を継いでいなかったが、こうした探検に参加できるということで、20歳代と考えられる。かりに23歳と仮定すれば和達の生年は天保5(1833)年となる。長男の和邦が万延元(1860)年と想定され、次男の録三郎が元治元(1864)年生まれであるから、この前後と考えて間違いがないと思われる。

鳥居本家を継ぎ、歴史に名を残す三十郎和祚が天保12(1841)年生まれであり、家柄には差があったものの、数歳年上の兄のような存在であったと考えられる。和達が三十郎の妹ちゃんと結婚して、三十郎の義弟となっていること、三十郎の妻子が三十郎謹慎から切腹までの期間、あるいはそれ以降も与一左衛門家に住んでいた事から考えると、三十郎と和達の関係は思いの外深く、三十郎の思想形成においても、こうした体験をしてきた和達の影響は大きかったのかもしれない。

町奉行・与一左衛門和達

その後、和達は家督を継いで、正式に与一左衛門を襲名し町奉行となった。その仕事ぶりは「年行事所日記」などにみることができる。しかし、村上町政は伊与部助次郎ら二名の大年寄(藩士格)が城下全般の町政を監督しており、その下に各町における年寄一名と組頭が運営していたので、大岡越前や遠山の金さんに見られるような多忙でエキサイティングなものではなかったように思える。

和達は、先に見たように家老であった本家鳥居内蔵助和利の三女ちゃんと結婚、本家とのつながりを増していく。万延元(1860)年には長男和邦が、元治元(1864)年には次男録三郎

が、慶応3(1867)年には四男銚次郎が生まれている。(三男については確認できなかった)。なお、ちんは、兄三十郎が天保12(1841)年生まれであるので、それ以降の生まれである。

慶応2年の正月

村上市史編纂の中心であった大場喜代司氏がかかれたエッセイに和達にふれた面白い一文があったのでその一部を紹介したい。主人公は番頭・中嶋源太郎である。大場氏が市史編纂のなかで手に入れられた中嶋の日記などを脚色して書かれたものと考えられる。

戊辰戦争の2年前、京都では混乱が高まっていた慶応二年、村上ではのどかな正月を迎えていた。しかしここに出てくる登場人物は、二年後、さまざまな運命をたどることになる。なお、中嶋源太夫は家老に次ぐ役職である番頭をつとめていた人物である。

慶応2年の正月2日は晴天だった。今年の暦であれば2月4日立春にあたる。まさに新春と呼ぶにふさわしい天気といえる。

(略)

4日も晴天だった。(略)

午後からはあまり良い天気なので下男の手次郎に投網を持たせ、瀬波から岩ヶ崎、大月へと散歩に出かける。土手にはまったく雪はなく、まさに春の陽気である。

瀬波の瀉では家中の嶋田丹治らが、うぐい捕りに興じていた。岩ヶ崎へ行くと、船小屋あたりに柴田茂左衛門や鳥居存九郎、水谷孫平治、重野兵馬、中尾専之助、牧大助が蓑を敷き日向ぼっこをしていた。

(略)

これが、中嶋源太夫のまことにのどかな正月であった。武家社会が大音響をたてて崩壊する明治維新の2年前のことである。

「昔のことせ！ ～村上むかし語り～ 村上の戦国・江戸・明治・昭和ものがたり」

(「村上市観光協会公式サイト」より <http://www.sake3.com/contents6371.html>)

和達は存九郎と幼名でよばれている。与一左衛門を襲名していなかったとも考えられるが、公的な文書でないため、慣れ親しんだ名、あるいは親しみの表れと考えたい。

瀬波海岸で、のんびりと正月を楽しんでいた人々は、二年後敵対的な関係となる。うぐい捕りに興じていた嶋田丹治の弟、鐵弥は江坂與兵衛殺害事件の犯人の遺書を残し自害、丹治も別の事件で新発田藩預けとなる。しかし殺害事件にかかわった可能性が高い。日向ぼっこをしていた6人のうち、柴田茂左衛門や鳥居存九郎(和達)、水谷孫平治の3人はいずれも抗戦派の首謀者として指名された16人に含まれ、探検仲間の存九郎と水谷は東京に送られて取り調べを受ける。

他方、重野兵馬は、戦争後の明治二年の人事配置で参政(旧大目付)という藩の重役に就いている。中尾専之助は不明であるが明治二年の民政執事(旧奉行)に中尾守之助という人物が見える。そして、非常に興味深いのが牧大助の存在である。牧は戊辰戦争において、羽越国境への新政府軍の先導をし、戦死した人物である。その際、陣地にいた抗戦派村上藩兵が「大助が来たぞ。撃て！撃て！」として射殺したとも伝えられる。(中島欽也

「武士道残照」) 抗戦派にとっては、気に入らない帰順派の中心であったことを思わせる人物である。ともあれ、他の5人が百石取り以上の給人という上級藩士なのに比べ、牧は四人扶持中小姓という下級武士であり、40歳前後と年齢も高い。牧がこの場にいたこと、それを中嶋が記録したこと自体、すでに重要な存在であったことをうかがわせる。

この六人が集っていた。グループだったのか、偶然だったのか、どのような話がされたのかなど、想像するだけでも興味深い。

緊張の高まり

その二年後、慶応4(1868)年2月18日、朝廷への帰順を求める使者が村上にやってくる。その出迎えの列の中で和達をみつけることができる。町奉行の与一左衛門が、藩の重臣と並んで麻の上下で迎えている。(安良町年行事所日記) このとき、村上藩では家老脇田蔵人の名で「天朝を奉戴し違背あるようなことはゆめゆめいたさぬ」との旨を報告をする。

その直後、同じ日記に再び和達の名を見つけられる。2月24日、与一左衛門が書記役木村主殿と庄内藩の鶴岡へ出発するのに際して、安良町に道路の整備などが命じられたとの記事である。(安良町年行事所日記) なお、同日、石井左右兵衛、平井伴右衛門も会津に向かっている。新政府軍からの書状を受け、会津藩・庄内藩と打ち合わせの必要があり、彼らが連絡調整にこの二藩に向かったと思われる。藩の運命にもかかわる使者として和達らが出張していることをみると、かなりの藩政の中核に近いところにいたと考えられる。

なお、三十郎は藩主親子の帰還を求めるために2月5日江戸に向かっており、2月12日家老脇田蔵人が京都へ、26日には久永惣右衛門も江戸に向かうなど、この時期村上藩では、情報収集と藩主の意向を聞くため、重役たちが東奔西走していたことが分かる。こうしたなか、三十郎の説得の甲斐があつて、藩主内藤信民が村上に到着、大歓迎の行事が執り行われる。閏4月12日には父危篤の報を受けて三十郎が帰国、16日には信思のもとで藩政改革を進めたが藩士の反発を受け失脚した江坂與兵衛も帰国する。

戊辰戦争のなか、抗戦派として活動

藩主が帰国したにもかかわらず、抗戦・帰順の対立は収まらなかった。さらに奥羽諸藩と新政府との対立が強まり、閏4月22日には新政府と戦う方針がほぼ固まり、村上藩など越後諸国への圧力も増していった。こうしたなか、閏四月下旬、村上藩も会津と結ぶことを藩内に表明したと思われる。(この点については別稿参照)

そして5月3日奥羽列藩同盟が正式に発足、6日には村上なども参加し奥羽越列藩同盟へと発展、5月8日にはついに村上藩兵が派遣される。6月8日、米沢藩の依頼を受け、あらたな藩兵の派遣が決まると、与一左衛門も士官の一人として出兵することとなる。(「鳥居三十郎自筆陣中日誌」)

藩内の対立は続いていた。6月10日、家老の久永惣右衛門が戦地・与板から帰着するが、三十郎は登城を禁止し、蟄居と隠居を命じ、25日には出頭を命じたが惣右衛門が応じなかったため、厳しい謹慎となる。

7月、戦局が緊迫化する中、藩主信民が急死する。自殺(縊死)という説と病死という説がある。7月下旬になると、新政府の新潟港奪取と長岡城再占領という二つの事態を経

て戦局は一举に新政府側に傾き、村上は越後内で取り残されることとなる。

そうしたなか、7月26日新政府軍は期限付きの降伏勧告を送るが、正式な返書は返せないままとなる。29日には、庄内藩士らが援助と称して村上城に入城、演習をしようとするので、藩内分裂はいつそう明らかになる。8月11日、落城。久永惣右衛門や鳥居左兵衛らは帰順、他の者も新政府軍には降伏した。三十郎らは、城内で火災が発生する中、羽越国境へと去り、庄内藩との一体化した戦いを進めた。この中に与一左衛門もいたと考えられるが、村上には戻れず、会津・米沢を經由し、三十郎らと合流した可能性もある。

羽越国境で与一左衛門がどのような立場であったのかこれも記録に残っていない。三十郎の九月一日の記録に、部隊編成が記されており、鼠ヶ関隊長の中に「鳥居外守」という人物名がある。当初は和達の別名かと考えたが、六月九日、与市左衛門らが出兵した日に「番士鳥居外守が三条表より到着」という記事があり、九月十八日にも「物頭役鳥居外守」との記載があるので、別人と考えるべきであろう。しかし、幕末の藩士一覧には三家以外の鳥居家の記載はなく、隊長をしている以上、一定の家柄であること、左衛門家は帰順派、三十郎家の系図にも該当者は見当たらないので、与一左衛門家の一族である可能性もある。

敗戦の中で～江坂與兵衛殺害事件と施餓鬼法要事件

9月会津藩が降伏すると、9月末になって庄内藩も降伏、三十郎ら抗戦派村上藩士らも新政府軍に降伏する。10月になると、抗戦派の藩士たちも続々と村上へ帰還、いくつかの寺に分かれて謹慎生活に入る。

帰還当初は、謹慎はかなり緩やかなものであったようで、三十郎の日記には、訪ねてきた妻と娘と面会したり、帰順派・抗戦派合同の会議を開いたり（与一左衛門も参加）、与一左衛門家に身を寄せていた三十郎の妻鋤と娘光（てる）を夜間に訪問したりしている。

三十郎や鋤からすると、父の久永惣右衛門は帰順派で三十郎の政敵であるため実家に身を寄せるわけにはいかず、義母の実家鳥居左衛門家もやはり帰順派であり、親戚筋で唯一抗戦派であり、同年代の子どもたちもいる与一左衛門家に身を寄せたと考えられる。

10月22日には、与一左衛門が謹慎中の三十郎を訪問、「内藤鋤吉郎とともに新発田まで出頭せよ」との新政府の連絡を伝えている。与一左衛門は謹慎とはならず帰順派中心の藩執行部との対応にあたっていたようにも見える。なお内藤は病気を口実にこれを拒み、三十郎は水谷孫平治（与一左衛門と樺太へいった人物）とともに、23日新発田へ向う。かい、27日まで滞在し、新政府側に内藤家存続のための嘆願書を渡そうともしたが拒絶されている。

三十郎が村上へ帰還した直後の10月28日、新政府は三十郎ら抗戦派3家老と与一左衛門ら重臣13人計16名を取り調べるとして、11月3日に伝達、以後16人は薩摩藩に、つづいて金革隊という新発田の民兵隊に預けられ、久永と島田直枝の指示を受けるように命じられる。

そして首謀者を差し出すようにとの政府の命令がでると、三十郎がその罪を引き受けた。三十郎は東京に喚問され、その後「斬刑とする」と命じられ、6月3日村上に戻り、25日切腹という形式で処刑される。

この間、6月20日、帰順派の中心人物江坂與兵衛が島田鐵弥ら数名のものに殺害され

る事件が発生、謹慎中の15名のなかに與兵衛殺害を命じたものがあるのではないかとの疑惑も広がった。さらに、盂蘭盆に、三十郎をはじめとする戊辰戦争死没者のための大施餓鬼供養がおこなわれ、藩士一同が麻の袴で参列した。政府はこうした事態を重視し、藩政をになっていた江坂衛守と久永惣右衛門を東京に召喚、與兵衛殺害事件と施餓鬼法要についての調査・報告を厳しく命じた。さらに、施餓鬼供養を計画をした疑いで、11月和達や近藤幸次郎ら謹慎中の5人を東京に出頭させ、和歌山藩邸に預け、取り調べた。

翌明治3(1870)年1月19日、島田鐵弥が「與兵衛殺害事件は自分が単独で犯行に及んだ」との遺書を残して自殺すると、藩政府は次のような報告を提出した。①施餓鬼供養は島田鐵弥の兄丹治と宝田五右エ門が勝手行ったことである、②藩士が麻の袴で参詣したなどの証拠はない。③與兵衛殺害事件は島田鐵弥の単独犯行で近藤幸次郎ら謹慎中のものに扇動されたとの事実はない。(あえて名をあげていることから、とくに疑惑で見られていたのは近藤であると考えられる。)その他、新政府の側で戦死した牧大助らには「見舞金」を、戦闘中に新政府に斬られた浅井土左衛門家は家督断絶とする。

政府は、この報告を了承し、島田丹治と宝田五右エ門の2名を新発田藩預けとして責任者の処罰は行わない、村上で謹慎中の脇田蔵人ら10名の謹慎を解除した。

他方、東京に送られていた与一左衛門(和達)5人は謹慎中であるにもかかわらず外出し狩猟を行っていたことが判明、加納藩に移送、さらに謹慎をつづけることになる。

その後の和達

こののち、与一左衛門(和達)がいつ謹慎を解除され、村上に戻ったのかはわからなかった。

その後の和達であるが、祖母の話によると、秩禄処分によって得た資金で茶屋を開いたが、知り合いのものたちに無償で飲み食いをさせるなどしたため、あっさりと失敗、没落していったとのことである。典型的な士族の商法といえる。

和達の戸籍上の名は淇松である。息子にあたる録三郎の戸籍には、亡父淇松と記されている。録三郎の父親の名前が、和達でも与一左衛門でもなく、淇松という見慣れない名前であるのか、あわせて、兄が和邦という諱であるのにたいし、なぜ曾祖父が録三郎、弟が錦次郎という名前なのか、その名前の付け方にも疑問があった。

淇松と和達が同一人物か、疑問に思ったが、録三郎の前戸籍が兄和邦のであり、和邦の父が和達であるが明らかであることから、淇松と和達は同一人物と断定した。

なぜこの名なのか。淇松は和達の隠居名と考えられる。この戸籍の元となった戸籍は明治4(1871)に作成が命じられ、翌明治5(1872)年に編製された壬申戸籍である。新政府に逆らった首謀者の一人であり、施餓鬼事件で東京に喚問され、さらに謹慎中の問題行動をおこしさらに謹慎を命じられた和達が当主でありつづけたことは考えにくい。明治3～4年段階、村上帰還前後に隠居し、家督を和邦に譲ったと考えた方が妥当であろう。

したがって、壬申戸籍編製時の当主は12歳の和邦である。戸主として名を届ける際、与一左衛門でとどけることも可能であったが、父の隠居のいきさつから諱の「和邦」を用いた。父は隠居名「淇松」を、弟たちはまだ元服前であったので、幼名の「録三郎」、「錦次郎」を用いたと考えることができる。

この時期、まだ戸籍という考え方が定着しておらず、簡単に改名できると考えたかもしれないがあらたな戸籍法では戸籍名を変更することは容易でなく、さらにその必要も薄れていたため、それぞれの名前が戸籍名として固定化されていったと考えたい。

「鳥居三十郎伝(旧版)」のなかに、和達が三十郎を偲んで呼んだ歌がのこされている。

述懐

時鳥雲井はるかにはほる名もきく袖ぬらす夜半の五月雨

鳥居和達氏、通称与一左衛門分家にして先考（※三十郎）の妹婿、和邦の父なり

そして、鳥居淇松、こと鳥居与一左衛門和達が、いつ、どのようにしてなくなったのかは調べることができなかった。しかし明治 21(1888)年、兄和邦の戸籍から分籍した次男録三郎の戸籍に、亡父として記されているので、この時期までになくなったことは確かである。